

二十四節気
七十二候の
旬を味わう

第二回

二十四節気とは、太陽の通り道「黄道」を十五度ずつ二十四に区切り、そのひとつひとつに節気を配して四季の移り変わりを表したものです。また、二十四節気をさらに三区に分し、季節の風物を言葉で表現したものが七十二候です。季節のうつろいを暮らしに取り入れるために、古くから日本で使われてきました。

銀杏

ぎんなん

公孫樹の種子のこと。
近世には公孫樹そのものを指したが、今は種子のみをいう。
葉が黄色く町を彩る頃になると、熟した実



文／うつくしいくらしかた
研究所

日本人が古くから日々の暮らしの中で実践してきたことや、暮らしの中にあつた考え方に改めて注目し、現代にも受容されうる「うつくしいくらしかた」を提案する。編著に『くらしのこよみ』『くらしのこよみ七十二候の料理帖』がある。



〔日本植物誌〕
〔P.F.ラウオンシーボルトより〕
「イナヨウ」

SALISBURIA adiantifolia.

が落ちて道路を覆い、強烈な臭いが漂う。これは外種皮に含まれるイチョウ酸やピルボールによるもの。殻の中にある黄緑色の胚乳組織のみが食用部分なので、土にしばらく埋めてから掘り出して洗い、臭いの強い外種皮部分をすっきり落としてから食用にするとうまい。独特の風味は和食には必須の材。殻のまま炒って酒の肴にしたり、割ってから加熱して、茶碗蒸しの具材、鍋物のあしらいに。

立冬

11月8日～22日頃

暦のうえでは、まさに今が冬の始まり。北国から初雪の便りが届いたり、冬の季節風が吹き始めるのもこの時期です。「今朝の冬」という季語がありますが、これは立冬の日の朝のことです。

七十二候

しちじゅうにじゅう

山茶始開

11月8日～12日頃

ツバキ科の花には大きく分けてツバキとサザンカの種がありますが、冬の初めに先駆けとして咲くのは、山茶花（さざんか）です。垣根にぼつりぼつりと花をつけ始め、見る者に冬の訪れを予感させてくれます。

地始凍

11月13日～17日頃

びんと張り詰めた冷気のもと、地面の土が固く凍てつく朝もあることでしょう。冬になったことが肌で感じられる時節です。季語の世界でも「海凍る」「川凍る」「月こおる」と、豊富な「こおり」に出会うことができます。

金盞香

11月18日～22日頃

「きんせんか」は、冬の花でも香り高いことで人気のある水仙のこと。昔中国で、花の黄色いところを黄金の杯（金盞）に、白い花弁を銀の台（銀台）にたとえて「金盞銀台」と呼ば慣らわしたことに由来します。

二十四節気

じゅうにせつせき